

荒野より

三島由紀夫

荒野より
三島由紀夫

中央公論社

檢
印

荒野より

定價 580 圓

昭和 42 年 3 月 1 日印刷

昭和 42 年 3 月 6 日發行

©1967

著者 三島由紀夫

發行者 山 越 豐

印刷所 精興社

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2 丁目 1 番地 振替東京34番

作品集

荒野より

目次

第一部 小説

荒野より

九

時計

元

仲間

五

第二部 エッセイ

谷崎潤一郎について

五

ナルシシズム論

七

現代文學の三方向

八

石原慎太郎『星と舵』について

二〇

團藏・藝道・再軍備

二五

夢と人生

二六

天狗道

二九

危険な藝術家

二三

私の遺書

二七

いやな、いやな、いい感じ

二四

日本人の誇り

二四

法學士と小説

二四

法律と餅焼き

二五

映畫的肉體論

二五

私のきらひな人

二五

テネシー・ウヰリアムズのこと

二七

空飛ぶ圓盤と人間通

二八

第三部 スポーツ

オリンピック

開會式

ボクシング

重量あげ

レスリングの練習風景

女子百メートル背泳

陸上競技

男子千五百メートル自由形決勝

體操の練習風景

體操

女子バレー

閉會式

實感的スポーツ論

ボクシング

三八

關ラモス戰（一九六四年三月一日）

原田ジョフレ戰（一九六五年五月十八日）

原田ラドキン戰（一九六五年十一月三十日）

原田ジョフレ戰（一九六六年五月三十一日）

第四部 紀行

ロンドン通信

三九

英國紀行

四〇

手で觸れるニューヨーク

四一

第五部 戯曲

アラビアン・ナイト

四二

第一部
小說

荒野より

梅雨時の或る朝、六時に徹夜の仕事を終つて就寢して、やつと眠りについたかつかぬに、私は、枕もとの冷房装置を傳はつて入つてくる父の聲に目覺めどろかされた。

冷房装置の機械を寢室の壁を穿うがつてとりつけて以來、私はしばしば、近所の普請の音や、選舉運動の聲に、眠りを妨げられるやうになつた。夏冬を問はず、この機械はあたかも簾のやうに、外部の音をよく通すのである。

父は同じ地所の別棟に住んでゐる。老齡の目覺めは早い。時によつては、私の就寢時刻は、父母の起床の時刻よりも遅くなることさへある。

その父の大聲が、誰かにしきりに呼びかけてゐる。

「おい、君、まだ寢てゐるんだよ。よしたまへ」

それに對する返事はきこえない。

私は半睡半醒の状態にゐて、今は何時かわからぬが、家人が御用聞きにでも大工仕事をたのんで、その音が私の眠りを妨げるのをおそれて、父が注意してゐるのだらうと思つた。もしさうだとすると、却つてその注意の聲が、寢入り端の私を起してしまつたのだから、迷惑といふことはない。

少時、沈黙があつた。注意が利いたのであらう。私は又眠りに沈み込もうと努めた。

父の次の聲が、前よりも尖つてきこえる。

「おい、君、よしたまへつたら」

それにもこたへず、何かしきりに木を叩くやうな音がする。ききわけのない人間がゐるものだと私は腹が立つた。

「おい、そんなに戸を叩いたらだめだ。戸が壊れるぢやないか」

はじめて私は事態の異常に氣づいた。カーテンの遮光が、晝の眠りのために、念入りに出來てゐるので、枕もとの時計の文字盤を読むにも、はつきり頭をもたげて、目を近づけて讀まなければならぬ。七時に近かつた。

たちまち、甲高い男の叫び聲がきこえて、戸を叩く音が尋常でない響きに變つた。芝居で、開門！ 開門！ と門扉を叩くときとそっくりな音で、ふり上げた拳の激越さが目に見えるやうである。

私は寢臺から跳ね起き、ナイト・ガウンをまとひ、木刀を執つて、隣りの家内の寢室へ走つた。家内も起きてゐた。私を見るなり、

「顔を見たわ」

と言つた。

咄嗟に何の意味かわからなかつた。私たちは階下へ駈け下りた。家政婦と女中が動顛してゐる。その間も、勝手口の戸が叩かれつづけて鳴動して、鎖錠がきしんでゐる。

母が別棟ですでに百十番に連絡してゐると思はれたが、家内が臺所へ走つて百十番へ電話をかけようと思つて、臺所のあかりをつけた。雨もよひの朝で、家の中は暗かつた。すると女中が、「灯をおつけにならないで下さい。そのほうが……」

と言つた。

家内は百十番を廻したが、お話中でなかなかかからない。そのうちに勝手口を叩く響きは止んだ。百十番は、やがて、「今そちらへ向つてゐるから、もう少し待つてくれ」といふ返事をよこした。

戸を叩く音が別のところへ移つた。どこの扉の音かわからない。しんとした家の中に、その亂れた激しい音だけがつづいてゐる。

私は再び二階へ駈け上つた。

叩いてゐるのは、家内の寢室の佛蘭西窓である。カーテンに覆はれてゐるので、叩いてゐる

人間の姿は見えない。

私はその頑丈な佛蘭西窓が、灰いろの朝の寢室の一角で、突然叛亂を起したやうに、ひしめき、鳴動するありさまを凝視した。白いレエスのカーテンは慄へ、扉の合せ目は弾け出すやうに揺いでゐる。

私は又階下へ降りた。永いことその佛蘭西窓を見てゐるのが、耐へられない氣持がしたのである。

階下では、子供をどう護るべきかを早口で囁きながら相談してゐた。まづ隠れ場所を考へ、次に逃げ場所を考へるのに、もつとも適當な部屋でなくてはならない。

そのとき家のどこかで、硝子の破れる鏘然たる音がひびいた。

「あなたを狙つてゐるんだわ。私が見に行つたはうが安全だわ」

と家内が私の手から木刀をとつて、二階へ上つてゆかうとした。

私は、家内にその木刀を預ける心持で、

「ぢや、俺が素手になる。俺も木刀をとつて来るよ」

と家内を押しつけて二階へ上つた。書齋の木刀をとりに行かうとしたのである。

このとき私の念頭には、書齋は、もう主人が仕事ををはつたのちの、がらんとした、靜かな、仄暗い場所と考へられてゐた。そこでまづ木刀を取つて、硝子の破れたところを點檢に廻ればよかつた。

私はまつすぐに書齋へ入らうとした。しかし戸口のところで立止つた。

部厚いカーテンに閉ざされた書齋の薄闇に、私の机のむかうの一角に、泛んでゐる人の顔を見たのである。

私には木刀のあり場所がわかつてゐたので、その顔を注視したまま、手さぐりで木刀を執つて、身構へた。すると心持が落着いた。

立つてゐるのは、瘦せぎすの、薄色のジャンパーを着た、かなり背の高い青年である。灰いろの光りのなかでこちらを見てゐるその青年の顔ほど、すさまじく蒼褪めた顔を私は見たことがない。

青年は手に、大きな緑いろの百科辭典の一冊をひろげてゐた。それは明らかに、机のうしろの百科辭典の一行から引抜いた一巻である。

私は一瞬にして、ふしぎな安堵を感じて、かう思つた。

『何だと思つたら、例によつて例の如き文學的觀念的狂人ぢやないか。それなら様子が知れてゐる。怖れることはない』

私は右手に木刀を構へたまま、

「何をしに來たんです」

と訊いた。

青年の蒼白な顔は極度の緊張のために、今にも一面の龜裂を生じて崩れさうだつた。その無表

情な顔と、餌をみつめる動物のやうな一生懸命な目が、私を見つめて、慄へ聲でかう答へた。

「本を……本を借りに來たんです」

それから一、二歩近づいたやうに思はれたが、それは體が揺れて、顎が前へ出て、一そうつきつめた聲音で、かう言つたのにすぎなかつた。

「本當のことを話して下さい」

「本當のこととは何です」

青年は喘ぎながら、しかし機械的にくりかへした。

「本當のことを話して下さい」

私はその意味を解しなかつたが、努めて穩やかにかう言つた。

「ああ。何でも本當のことを話ませう」

さうして時を稼がうと思つたのである。

そのとき私の肩がうしろから押された。

警官が入つて來た。さらに二人の警官が入つて來て、青年を取り圍んだ。

「本當のことを話して下さい」

と青年はもう一度、熱に浮かされたやうに叫んだ。

「それぢや、靜かなところへ行つて、ゆつくり話さう」

と制服の警官の一人が言つた。